

神田神保町散策 —韓国を探して—

二階 宏之

神保町駅の出口を出ると靖国通り沿いに古書店が軒を連ねる。目指す書店はこの賑やかな界限ではない。水道橋方面の路地を一步入った裏通りにある。初めて神保町に来た人にはなかなか目につかない一画だ。六一書房は考古学を専門とする新刊と古書を扱う書店だ。中国や韓国に関する書籍も豊富に揃えている。一階が新刊、二階が古書という配置だが、書架に収納できない本が床や階段脇に山のようにあふれている。注目するのは韓国古書。韓国の古書を専門に扱う書店は少なく、その道の研究者にとっては頼りになる店だ。社長の八木唯史さんに韓国の古書店事情について話を聞いてみた。「韓国では、古書店が都心から姿を消している。



六一書房：専門書であふれる店内（筆者撮影）

その主な理由は地価の高騰だ。店舗の維持費が経営を圧迫するため、地方で開業することが多くなっている。開業とはいつても店舗販売は行わず、事務所のな

かに商品を山積みにしてコンピュータ相手に毎日葛藤する店が多い。もうひとつの理由は店主の高齢化や後継者の不足で廃業してしまうことだ。「ネット販売はかなり進んでいて、古本のポータルサイトもあるが、独自のホームページで販売する店が多い」。今後の意気込みを聞いてみた。「楽しく仕事をすることが一番である。韓国書籍は楽しみながらやっているし、競合先もないため、今後クシヨも開催してみたい。しかし、近隣のスペース確保が難しく賃貸料もかかるのでなかなか難しい。今は、法人とネット相手に四苦八苦している状況なので、接客的な仕事まで手が届くかどうか。現在の仕事を地道にやっていたら将来の強みになっていくだろう」と、謙虚に語ってくれた。六一書房を出て、いくつか書店をまわってみた。水道橋駅近くにある高麗書林は韓国の新刊書籍を扱っている。本は韓国からの取り寄せが中心だ。靖国通りの裏手にあるアジア文庫は、韓国と北朝鮮に関する日本語の新聞と語学教材を豊富に揃えており、ハンゲルがわからない人にお勧めできる。靖国通りに引き返し、休憩場所を探していると、韓国書籍が読めるブックカフェの看板が目に入った。どうやら蕎麦屋の三階にあるらしい。狭い階段を上がるとそこには（CHEKCCORI（チエッコリ）営業中）とかかれた扉があった。勇気を出してなかに入ると、本に彩られたかわいらしい空間が待ち受けていた。展示本を横目にみなが



CHEKCCORI：書架には韓国書籍がずらり（筆者撮影）

ら奥へと進むと、韓国語書籍に囲まれたカフェスペースが広がった。二人がけのテーブルが一六席。韓国語の小説や詩、児童書、漫画など約三〇〇冊と韓国語学習書、韓国関連の日本語書籍約五〇〇冊を取り揃えて販売する。手に取って読むことも可能だ。韓国から仕入れた雑貨もおりである。お店の人に話を伺うと、もともと韓国語書籍の翻訳出版を手がけてきた会社であるが、情報発信と交流の場として二〇一五年七月にオープンしたという。韓国や日本の作家やアーティストを招いたトークショーなども開催する。珈琲の香りを楽しみながら小説をばらばらめくる。都会の喧騒を忘れて韓国の世界に没頭できるひとときである。雑貨を何点か購入し、メッセージノートに感想を綴って店を後にした。一日で神保町を回ることは到底できないが、ゆっくり時間をかけて探索してみると意外な発見に出会うかもしれない。（にかい ひろゆき／アジア経済研究所 図書館 研究情報レファレンス課課長）